

見てきたもの

コミュニケーション活動には、伝えたいメッセージが不可欠。

自己表現に子どもは意欲的に取り組む。英語を使って人との関わることで、子供たちの心が育っていく。ハードルを上げることで、子どもはより意欲的になる。教師ができないと思った時点で子どもの可能性を摘んでいる。達成感が自信を生み出し、それが力となる。一斉授業をしつつも、子どもたちと個別に関わりを持つことが大切である。(個々の関わりの大切さ)

うれしかったこと

- ・ 授業で子どもと多く関わったこと。
- ・ 子供たちが課題に前向きに取り組んでくれたこと。
- ・ 英語の授業を学年の話題にできたこと。
- ・ 家庭の食卓で、英語の授業の話題が出たこと。

未来を見据えて

- ・ 大切なのは、子供たちに力をつけること。
- ・ 英語を通じてメッセージを伝えること。
- ・ IT 機器の活用。(電子教科書の行方・パワーポイント・映像メディアの活用)
- ・ 英語教室の設置と活用。

体当たりで生徒に向かっておられる姿勢に敬意を表したい。



単語習熟プリント 1 Show and Tell

発音しながら①指書き ②なぞり書き ③写し書きの3ステップで必ず練習して覚えよう!

①	スピーチ speech	キーチェーン key chain	gave gave	デュリング during	バケーション vacation
②	speech	key chain	gave	during	vacation
③					

次に読み仮名をかたかなで書いてみよう! 発音しながら指書き、なぞり書き、写し書きをします。

①	speech	key chain	gave	during	vacation
②	speech	key chain	gave	during	vacation
③					

発音しながら①指書き ②なぞり書き ③写し書きの3ステップで必ず練習して覚えよう!

①	always	keep	Sydney	summer	Australia
②	always	keep	Sydney	summer	Australia
③					

読み仮名をかたかなで書いてみよう! 発音しながら指書き、なぞり書き、写し書きをします。

①	always	keep	Sydney	summer	Australia
②	always	keep	Sydney	summer	Australia
③					

Class() No() Name ()

実践紹介:「元気の出る授業」

～子どもたちが活動を通して「気づく」「学ぶ」授業を目指して～

枚方市立第2中学校教諭 岡 順二

1 はじめに

子どもたちに力をつけたいという一心で、従来の文法・訳読・解説を重視した授業を20年近く続けてきた。説明・解説の技量は伸びたとは思いますが、自己満足にすぎず、子どもたちが、授業で何かに気づき、自ら学んでいるという実感が、伝わってこなかった。ある時を境に、教師主体の授業を続けていて、言葉の4技能を伸ばすことができるのか、疑問を感じるようになった。子どもたちが自分を表現できる授業、子どもたちの声が響く授業、相手の発話から学ぶ授業、つまり子どもたちが主体となって取り組める授業の模索がスタートだった。

2 授業のコンセプト

「話す」「聞く」重視の現行カリキュラムが実施されたが、子どもたちの英語運用能力は伸びていない。学校教育への不信感から、子どもと保護者は塾を選択している。学校は塾以上に魅力的でなければいけない。塾を超える授業を提供することが望まれている。そのためには、授業の中で、コミュニケーション能力と平行して、入試突破のスキルを育成する必要がある。ただ、詰め込み一辺倒、講義主体となってしまっは塾と同じになってしまう。目指すは、両方が満たされる魅力的な授業である。現行入試を分析してみると、入試問題も変化していることがわかる。大きく見ると、言語の知識を問う出題から、リスニング問題や長い英文を読み、理解力を問う問題に移り変わってきている。授業の中では、コミュニケーション活動を中心に据えながら、入試にも対応できるよう、言語知識の習得にも努めていきたい。

3 学習活動の工夫

●「自分が楽しい授業」

授業が終わったとき、今日があつという間に終わったなあと思える授業を目指したい。そのためには子どもを飽きさせない工夫が必要である。授業で心掛けているのは、スピードと展開で、メリハリと切り替えが授業の生命線である。どの活動も10分～15分を基本にしている。生徒はどんな活動でも、すぐに飽きるので、暇を与えないこと、4技能をスパイラルにからませること、静動・強弱・質と量、そしてパターンの切り替えなど、常にバランスを意識することが大切である。

●いきなり音読

授業のスタートは必ず音読から。毎時、子どもたちを起立させ、教科書の音読から授業をスタートする。いわゆる、体育の授業で言えば、準備体操である。これを習慣化し、3年で英語の基礎体力を養成することを目指している。

●授業は生徒主体

クラスの個々の生徒が1時間にどれだけ発話したかを重視したい。そのため、教師の発話量はできるだけ削る。生徒に活動させ、しゃべらせる。生徒の一人あたりの発話量を確保するため、一人が発話して、みんなが聞いている時間をできるだけ減らし、みんなが同時に発話している時間を確保する。

●ペアワーク活動の充実

言葉は相手とのやり取りが基本である。ペアで音読活動に取り組ませる。言葉は生き物なので、他者との言葉のやりとりをすることで、他者との協力関係が生まれ、そこから、子どもたちは多くを学び、クラスが活性化する。

●音読→暗唱→暗写の徹底

教科書を最大限に活用し、教科書の英文を覚え込ませる。学年が上がるにつれて、文が長くなり、覚えにくいと思うが、これは覚えることが習慣化されていないからであると思う。短時間で覚えたものは消えやすい。ある程度の時間をかけ、何度も繰り返し音読、暗唱し暗写までもっていくことで、英文を体に染みこませることが大切である。音読においては、単語だけではなく、語句のまとまり（チャンク）を常に意識させ音読させることで、内容への理解をより深めていく。

●暗唱・発表など自己表現の機会

内容を吟味し、良い題材を一年時から与え暗唱させる。たとえ、それが3年生の教材であってもかまわない。（試しに、1年生にセヴアン鈴木“リオの伝説のスピーチ”を暗唱させた。高いハードルを設定することで、子どもたちの潜在能力を引き出した。）自己紹介、他己紹介、Show and Tell、偉人の紹介など、人前で発表する機会をできるだけ設ける。人前での発表は緊張感を伴う。それを乗り越えていくことが、子どもたちの自信につながり、その達成感が学習意欲を向上させる。

4 まとめ

- * 子どもを学習活動の中心に据えることで、子どもたちは意欲的になった。
- * 参加型学習で、やらされるのではなく、自分からやる姿勢が育ってきた。
- * 音読活動を通じ、音のつながりを自然に意識できるようになった。音に慣れることで、リズム、イントネーションや強勢のとりかたがスムーズになった。
- * チャンクを常に意識させ、英文を読み込ませることが、英文の読解力に大きな効果を果たした。

* * * * *

■「明日からの授業実践のために -英語授業の哲学-」 大阪女学院大学 教授 中井 弘一

残った1時間少しを、私の方で、英語教員として持っていて欲しいと願う教育哲学について話した。前日の府高英研で講演の話と同じ内容であったが、その時の参加者が3人もこの勉強会に駆けつけていただき、どうしようかと思った。厚顔で同じ内容に少しアドリブを加えて話した。

要旨

教師は教師である前に、「生きていることに夢を持ち」「好きなことがある」など『普通の人』であること、その上で「勉強する」